



Title	小・中学生の生活意識と大人への評価：札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査
Author(s)	加藤, 弘通; 高橋, 陸斗; 川原, 里奈
Citation	子ども発達臨床研究, 14, 1-12
Issue Date	2020-03-25
DOI	10.14943/rcccd.14.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77562
Type	bulletin (article)
File Information	020-1882-1707-14.pdf



[Instructions for use](#)

資料論文

小・中学生の生活意識と大人への評価

— 札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査Ⅲ —

加藤 弘通¹・高橋 陸斗²・川原 里奈²The Survey of current situation of Children in Sapporo
from perspectives of school adaption, parent-child relationship,
self-esteem and evaluation for adults

Hiromichi KATO, Rikuto TAKAHASHI, Rina KAWAHARA

問題と目的

本研究は「さっぽろ子ども・若者白書」をつくる会と北海道大学大学院教育学研究院子ども発達臨床研究センター・子ども発達支援部門が共同プロジェクトとして、行っている札幌市の小中学生の生活実態について報告するものである。なおこれまでの実態調査の結果については、太田・柳・水野・加藤 (2016)、加藤・水野 (2018)、加藤・水野・侯・濤岡 (2019) があり、本研究は、2019 年度冬期に行われた調査をもとに分析をしたものである。

本研究では、札幌市の小学生・中学生の学校・家庭・自己に関する意識の実態、およびその関連要因を明らかにするとともに、本年度は小中学生が周囲の大人をどのように認識しているのかについても検討する。具体的には「一番身近なおとなの人を思い浮かべてください。そのおとなの人は毎日を楽しそうに過ごしていますか？」という質問を行った。日本の子ども・若者をめぐっては、諸外国の子ども・若者と比べて自尊感情が低いこ

とや将来に対して明るい希望をもっていないことなど、否定的に評価されることが多かった (古荘, 2009)。例えば、内閣府 (2019) が 13 歳～29 歳の若者を対象に行った国際比較調査では、将来の希望として「あなたは自分の将来について明るい希望を持っていますか」という質問を行っている。この質問に対し、日本の若者で「希望がある」「どちらかという希望がある」と答えた者を合わせると、60.6%であった。これは、ドイツ (81.7%)、フランス (84.2%)、韓国 (77.7%)、イギリス (88.4%)、スウェーデン (89.0%)、アメリカ (92.5%) の若者に比べ、極端に少なかった。また 40 歳になったときのイメージについて「幸せになっている」に関しても、他国の若者の 8 割前後が「そう思う」「どちらかというと思う」と回答しているのに対し、日本の若者では 63.9%にとどまっていた。

このように現在のみならず、日本の子ども・若者が自分自身の将来に対しても評価が低いのはなぜだろうか。その理由のひとつに、今現在の大人たちが子どもたちに、肯定的な姿をみせられていない。したがって、子どもたち自身も自分の将来

¹ 北海道大学大学院教育学研究院 准教授² 北海道大学大学院教育学院 博士前期課程

(大人になったとき) に対して、好意的な評価をもつことができないのではないかということが指摘されることがしばしばある(例えば、ベネッセ教育研究所, 2008)。しかし、実際のところ、子どもが大人のことをどのように評価しているのか。またその大人とはいったい誰のことなのかといったことを詳細に検討したものはみられない。そこで本研究では、子どもの大人に対する評価を検討することとした。

方 法

1. 調査協力者

札幌市内の公立小学校17校の4～6年生2,899名、公立中学校20校1～3年生8,415名、計11,407名。対象者の性別、学年、学級種、在住区の内訳はTable 1～3の通りである。

2. 手続き・調査内容

札幌市の小中学校の校長会を通じて調査協力校

Table 1 調査協力者の内訳(人)

		男子	女子	計
小学校	一般学級	1,449	1,416	12,865
	特別支援学級	31	3	34
	計	1,480	1,419	2,899
中学校	一般学級	4,312	4,103	8,415
	特別支援学級	69	23	92
	計	5,861	5,545	11,407

Table 2 各区の調査協力者の内訳(人(%))

中央区	1,097 (9.6)
北 区	1,133 (9.9)
東 区	825 (7.2)
白石区	1,591 (13.9)
豊平区	551 (4.8)
南 区	1,386 (12.2)
西 区	1,232 (10.8)
清田区	1,627 (14.3)
手稲区	797 (7.0)
厚別区	1,168 (10.2)

Table 3 各学年の協力者数の内訳(人)

小学校	4年生	925
	5年生	918
	6年生	1,052
中学校	1年生	2,795
	2年生	2,884
	3年生	2,848

を募った。その後、調査に協力してくれる学校において、各学級担任を通して質問紙調査を配布、実施した。質問紙の内容については、①学校生活について(4項目)、②授業について(教科の好み、理解・関心度、各11項目)、③授業や宿題で分からないときの対応(5項目)、④友だちとの関係(4項目)、⑤教師との関係(5項目)、⑥学校・家庭への安心感(2項目)、⑦大人に対する評価(2項目)、⑧家族関係(3項目)、⑨自分への意識(7項目)であった。⑦以外は、「まったくあてはまらない(1点)～非常に当てはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。⑦「一番身近なおとなの人を思い浮かべてください。そのおとなの人は毎日を楽しそうに過ごしていますか?」については「まったく楽しそうではない(1点)～すごく楽しそう(5点)」の5件法で回答を求め、さらに「そのおとなの人はだれですか、ひとりだけ選んで番号に○をつけてください」には、母親、父親、学校の先生、祖父母、親戚の人、習い事の先生・コーチ、きょうだい、近所の人、その他(自由記述)で回答を求めた。

実施時期は2019年10月～12月であった。

結 果

1. 学校・家庭・自己に対する意識

学校、家庭、自己についての意識を知るために、「学校は楽しい」「家庭は楽しい」「自分のことが好きだ」それぞれについて、学年別の回答割合をFigure 1～Figure 3に示した。まず「学校は楽しい」(Figure 1)については、7～8割の子どもが肯定的な回答(「どちらかというとはまる」+

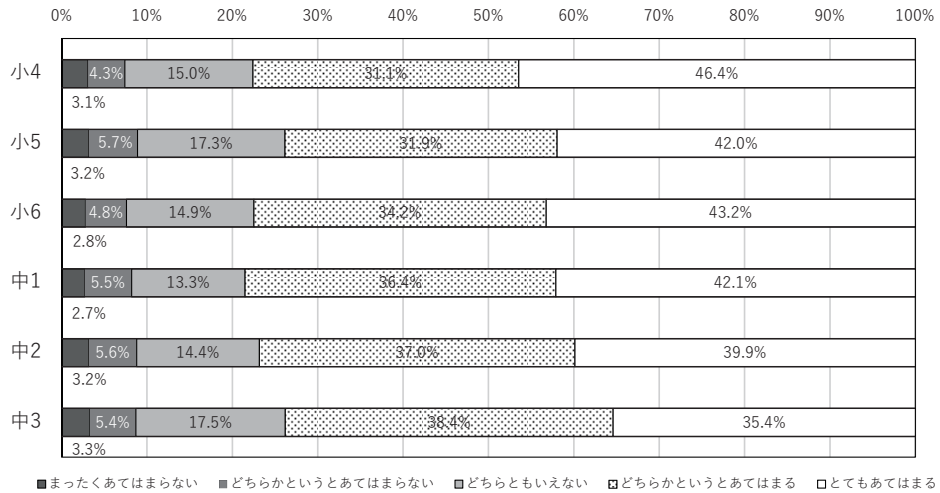


Figure 1 「学校は楽しい」の学年による比較

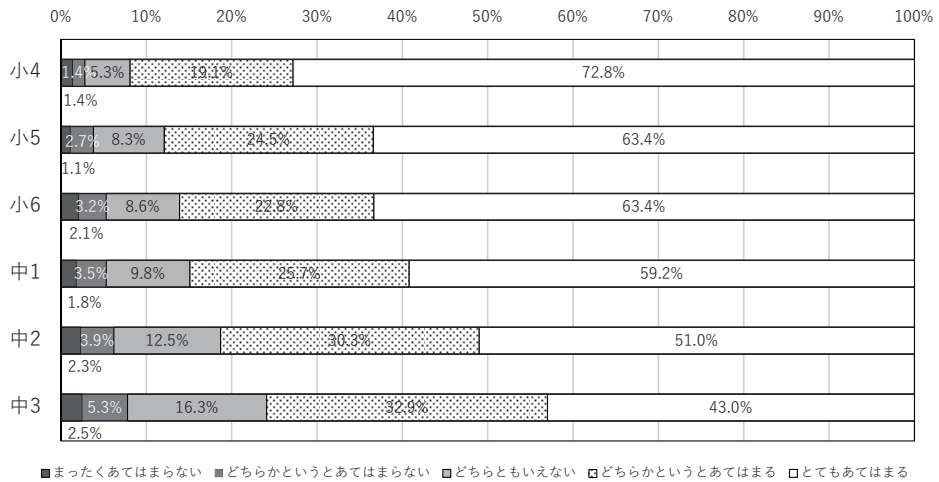


Figure 2 「家庭は楽しい」の学年による比較

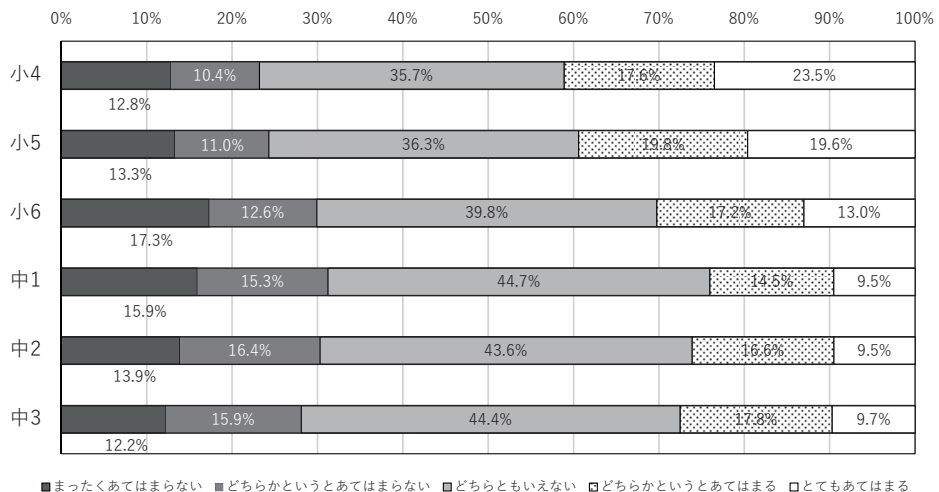


Figure 3 「自分のことが好きだ」の学年による比較

「とてもあてはまる」) をしていた。学年別にみると、小学生では5年生で他の学年と比較すると肯定的な回答の割合が若干低く、否定的な回答の割合が高くなっていった。一方、中学生では学年が上がるにつれて若干ではあるが、肯定的な回答の割合が減り、「どちらともいえない」の割合が増える傾向にあった。

次に「家庭は楽しい」(Figure 2) については、7割～9割強の子どもが肯定的な回答をしていた。学年別にみると、学年を追うごとに肯定的な回答の割合が減り、「どちらともいえない」の割合が増える傾向がみられた。またいずれの学年でも肯定的な回答が多数を占める中、「まったくあてはまらない」と回答する児童生徒が数%いることも気になる点である。

最後に「自分のことが好きだ」(Figure 3) については、上記の2つと大きく異なって、肯定的な回答の割合が少なく、否定的な回答の割合が多かった。特に中学1年生以降は、否定的な回答の割合が肯定的な回答の割合を超えており、「どちらともいえない」の割合が4割を超えている。また学年による違いに注目し、大きな視点で見ると、小学校から中学校にかけて肯定的な回答が減少し、中学1年生が肯定的な回答の割合が最も低かった。

2. 学校・家庭・自己への意識と関連要因

(1) 学校への意識と関連要因

それではこうした学校や家庭の楽しさ、および自己に関する意識には、どのような要因が関連しているのだろうか。まず学校への意識の関連要因を検討するために、他の学校生活に関する要因、友人関係、教師との関係に関わる要因と学校の楽しさの関係について、校種別に Pearson の積率相関係数を求めた (Table 4)。

小学生では「授業(勉強)は楽しい」($r = .635, p < .01$) がもっとも強く関連し、次いで「学校は『安心できる場所』である」($r = .580, p < .01$) が比較的強く関連していた。それに対し、中学生では「行事は楽しい」($r = .625, p < .01$) と「学校は『安心できる場所』である」($r = .588, p < .01$) がもっとも強く関連しており、次いで「授業は楽しい」($r = .576, p < .01$) が比較的強く関連していた。小中学生ともに授業と安心に関わる要因が、学校の楽しさに関連しており、これは昨年度と同じ結果であった(加藤・水野・侯・濤岡, 2018)。改めて、授業と居場所としての学校の機能が重要であることがわかる。

上記の要因に次いで学校の楽しさに関わっていたのは、「友だちはたくさんいるほうだ」「友だちといると楽しい」といった友人関係の要因であっ

Table 4 「学校は楽しい」と関連要因の相関

	小学生	中学生
学校の授業(勉強)は楽しい	.635**	.576**
学校は「安心できる場所」である	.580**	.588**
学校の行事は楽しい	.546**	.625**
先生といると楽しい	.456**	.398**
友だちといると楽しい	.421**	.437**
友だちはたくさんいる	.403**	.442**
先生は私の気持ちをわかってくれる	.389**	.350**
先生は話を聞いてくれる	.387**	.341**
自分の良いところも悪いところもわかってくれる	.365**	.339**
先生は困ったときに相談できる	.360**	.335**
家庭は「安心できる場所」である	.266**	.274**
学校生活はとても忙しい	-.130**	.060**

** $p < .01$

た。また小学生に比べ、中学生のほうが相関係数の値が高く、友人関係が学校の楽しさに関わる要因として、より強く関連していることがわかる。さらに教師との関係についても、小中学生ともに正の相関がみられ、教師との関係が良いほど、学校生活を楽しんでいることがわかる。また教師との関係は、小学生においてより学校の楽しさと関連していることがわかる。

最後に相関係数の値は低かったが、「学校生活はとても忙しい」に関しては、小学生で負の相関がみられたのに対し、中学生では正の相関がみられた。これは小学生では、学校生活をとても忙しいと思っているほど、学校の楽しさが低下することを示している一方で、中学生では逆に、学校生活をとても忙しいと思っているほど、学校の楽しさが高まることを意味している。つまり、多忙感小学生では学校生活に否定的に働くのに対して、中学生では肯定的に働く可能性があることが示唆される。

(2) 家庭への意識と関連要因

家庭への意識の関連要因を検討するために、他の家庭生活に関する要因、および不登校感情と家庭の楽しさの関係について、校種別に Pearson の積率相関係数を求めた (Table 5)。

小学生では「家庭は『安心できる場所』である」($r = .652, p < .01$) がもっとも強く関連しており、次いで「家族は自分の話をよく聞いてくれる」($r = .608, p < .01$)、「家庭での心配ごと」($r = -.278, p < .01$) が「家庭は楽しい」と関連していた。中

学生では「家族は自分の話をよく聞いてくれる」($r = .708, p < .01$) がもっとも強く関連しており、次いで「家庭は『安心できる場所』である」($r = .708, p < .01$) が関連していた。しかし、相関係数に注目すると、小学生に比べ、中学生の相関係数のほうが高く、これら2つの要因が非常に強く関連していることがわかる。つまり、家庭は「安心できる場所」である、家族は自分の話を聞いてくれると思っている者ほど、家庭を楽しんでいること、特に中学生においてはその関連性が極めて強いといえる。

一方、「家庭での心配ごとがある」については、小中学生ともに負の相関がみられ、心配ごとがある者ほど、家庭が楽しくなくなる傾向がみられる。さらに学校との関連でいうと、「『学校に行きたくない』と思うことがよくある」との間にも、小中学生ともに負の相関がみられ、家庭が楽しくない者ほど、学校に行きたくないと思う傾向が強くなる、あるいは学校に行きたくないと思っている者ほど、家庭が楽しくないと思う傾向が強くなることがわかる。

(3) 自己意識と関連要因

自己意識の関連要因を検討するために、他の自己に関する要因、家庭の楽しさと学校の楽しさ、および友人関係の要因と自分のことが好きだについて、校種別に Pearson の積率相関係数を求めた (Table 6)。

小中学生ともに「自分にはいいところがたくさんある」(小学生、中学生の順に $r = .666, p < .01$; $r = .722, p < .01$) 「自分は人から必要とされている」($r = .610, p < .01$; $r = .665, p < .01$)、「自分

Table 5 「家庭は楽しい」と関連要因の相関

	小学生	中学生
家庭は安心できる場所である	.652**	.708**
家族は自分の話を聞いてくれる	.608**	.722**
家庭での心配ごとがある	-.278**	-.282**
「学校に行きたくない」と思うことがよくある	-.231**	-.242**

** $p < .01$

Table 6 「自分のことが好きだ」と関連要因の相関

	小学生	中学生
自分はいいところがたくさんある	.666**	.722**
自分は役に立つ人間だ	.628**	.665**
自分は人から必要とされている	.610**	.677**
友だちはたくさんいる	.315**	.322**
学校は楽しい	.270**	.296**
家庭は楽しい	.270**	.288**
友だちといると楽しい	.252**	.203**

** $p < .01$

は役に立つ人間だ」($r = .628, p < .01$; $r = .665, p < .01$) が強く関連していた。次いで高い関連性がみられたのは「友だちはたくさんいる」($r = .315, p < .01$; $r = .322, p < .01$) であり、「友だちといると楽しい」よりも強く関連していた。

また家庭の楽しさ、学校の楽しさもそれほど高くないが、「自分のことが好きだ」と関連しており、家庭・学校生活が子どもの自己肯定感や自尊感情に関係していることがわかる。

3. 大人は楽しそうか

(1) 大人に対する評価

2019年度の調査では、この年度に限った調査項目として「子どもの大人に対する認識」を取り上げた。そこで今回の調査では「一番身近なおとなの人を思い浮かべてください。そのおとなの人は毎日を楽しそうに過ごしていますか」という質

問と「そのおとなの人はだれですか？ひとりだけ選んでください」という質問に回答を求めた。

Figure 4 は校種・男女別に大人の人は毎日楽しそうに過ごしているかの割合を、対象を限定せずに大人全体の評価を示したものである。小学生では7割以上の者が「楽しそう」「すごく楽しそう」(以下、肯定的な評価と表記)と答えており、中学生では少し減って7割弱の者がそう答えていた。また「すごく楽しそう」に注目すると、顕著に小学生の回答割合が高く、その分、中学生では「どちらともいえない」という回答の割合が多くなっていった。さらにいずれの校種も男子より女子のほうが肯定的な回答の割合が高かった。

次に身近なおとなの人といったときに思い浮かべた対象について Table 7 に示した。小学生、中学生ともに顕著に多かったのは母親であり、小学生(59.4%)よりも中学生(66.2%)のほうが母

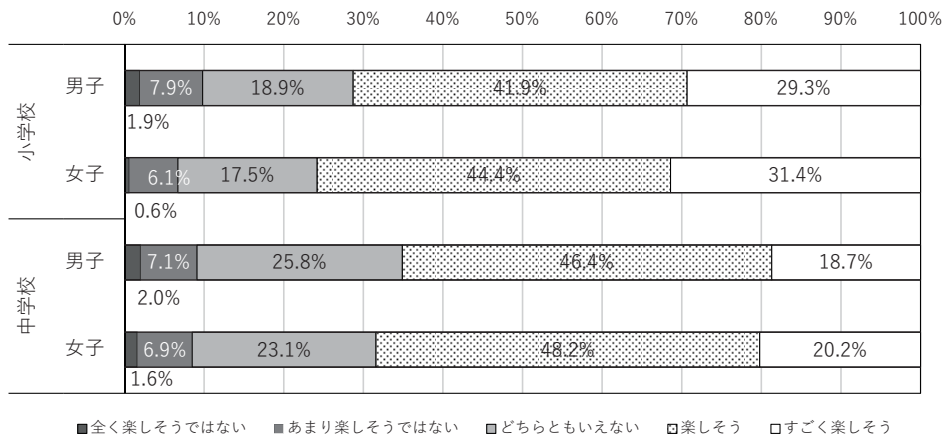


Figure 4 大人は毎日を楽しそうに過ごしている (大人全体)

Table 7 思い浮かべた大人の校種別の人数と割合

	小学生		中学生		計	
	N	%	N	%	N	%
母親	1,641	59.4%	5,377	66.2%	7,018	64.5%
父親	270	9.8%	796	9.8%	1,066	9.8%
学校の先生	130	4.7%	316	3.9%	446	4.1%
祖父母	137	5.0%	239	2.9%	376	3.5%
親戚の人	56	2.0%	123	1.5%	179	1.6%
習い事の先生・コーチ	109	3.9%	241	3.0%	350	3.2%
きょうだい	209	7.6%	546	6.7%	755	6.9%
近所の人	56	2.0%	121	1.5%	177	1.6%
その他	50	1.8%	123	1.5%	173	1.6%
家族*	104	3.8%	235	2.9%	339	3.1%

* 母親、父親、祖父母、きょうだいの複数に回答した者

親を想起する者が多かった。次いで多かったのは父親（計9.8%）であり、きょうだい（計6.9%）、学校の先生（計4.1%）と続いていた。その他には「ネットの人」や「親の友人」、「芸能人」などが含まれていた。

(2) 大人の対象別による評価の違い

評価する対象によって、大人が毎日を楽しんで過ごしているか否かに違いがあるかを検討した。具体的には母親、父親、学校の先生に注目した。

まず母親についてみると、小中学生ともに男女差がみられ、男子に比べ女子のほうが肯定的な評価をする者の割合が高かった。また大人全体の結

果と比較すると小学生男子では全体で71.2%が肯定的な評価をしていたのに対し、母親では66.1%、小学生女子では全体で75.8%が肯定的な評価をしていたのに対し、母親では73.8%と若干の低下がみられた。中学生では、男子では全体で65.1%が肯定的な評価をしていたのに対し母親では61.6%、女子では全体で68.4%が、母親では67.3%と、男子でのみ若干の低下がみられた。つまり、男子の児童生徒の母親に対する評価は、他の大人への評価と比べると、楽しんでいると答える者の割合が低いということである。

学年差については、肯定的な評価全体では違いはみられないが、「すごく楽しそう」に絞って検

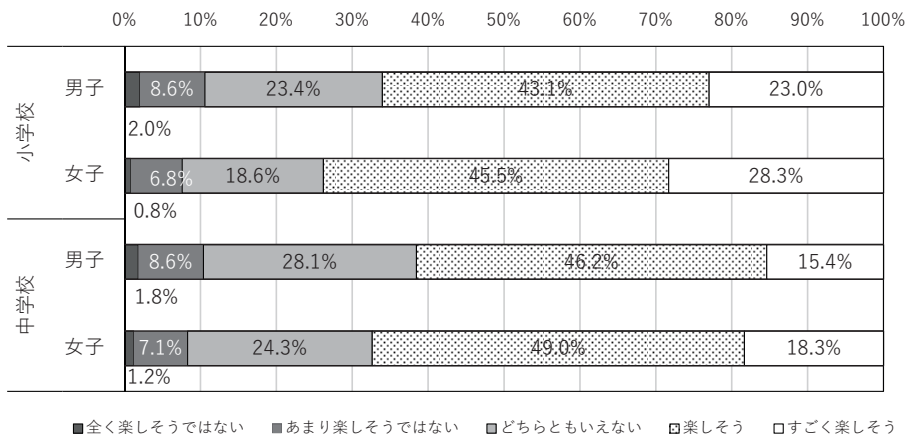


Figure 5 大人は毎日楽しそうに過ごしている (母親)

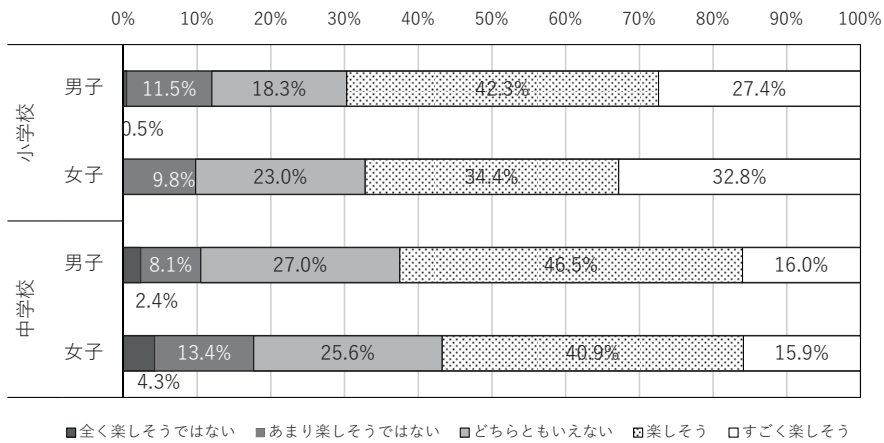


Figure 6 大人は毎日楽しそうに過ごしている（父親）

討すると、小学生よりも中学生のほうがその割合が少なかった。ただし、その分、否定的な評価（「全く楽しそうではない」「あまり楽しそうではない」）が増えているわけではなく、「どちらともいえない」の割合が増えていた。

次に父親についてみると、小中学生ともに女子に比べ男子のほうが肯定的な評価をする者の割合が高かった。また大人全体の結果と比較すると小学生男子では全体で71.2%が肯定的な評価をしていたのに対し、父親では69.7%、小学生女子では全体で75.8%が肯定的な評価をしていたのに対し、父親では67.2%と、女子で若干の低下がみられた。中学生では、男子では全体で65.1%が肯

定的な評価をしていたのに対し父親では62.5%、女子では全体で68.4%が、父親では56.8%と、女子で顕著な低下がみられた。つまり、女子の児童生徒の父親に対する評価は、他の大人への評価と比べると、楽しんでいると答える者の割合が低いということである。

さらに学校の先生についてみると、小学生と中学生で異なる男女差がみられ、小学生では男子のほうが若干、肯定的な回答の割合が少なく、中学生では男子に比べ女子のほうが肯定的な回答の割合が少なかった。ただし、「すごく楽しそう」に注目すると、中学生は女子のほうがその割合は高かった。また大人全体の結果と比較すると小学生

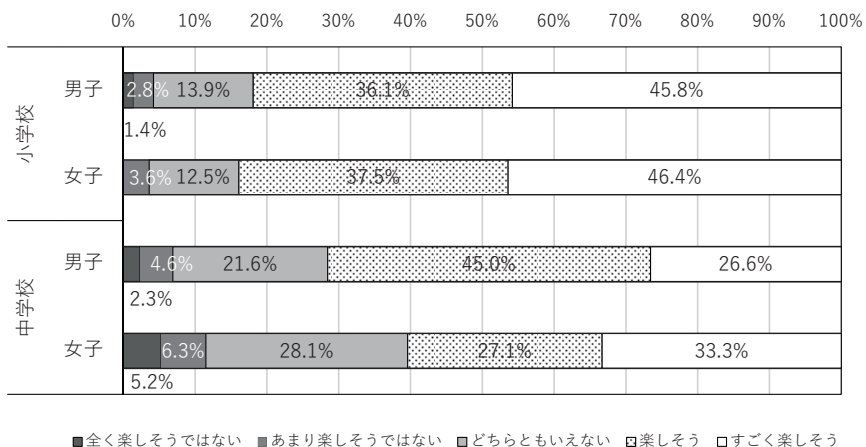


Figure 7 大人は毎日楽しそうに過ごしている（先生）

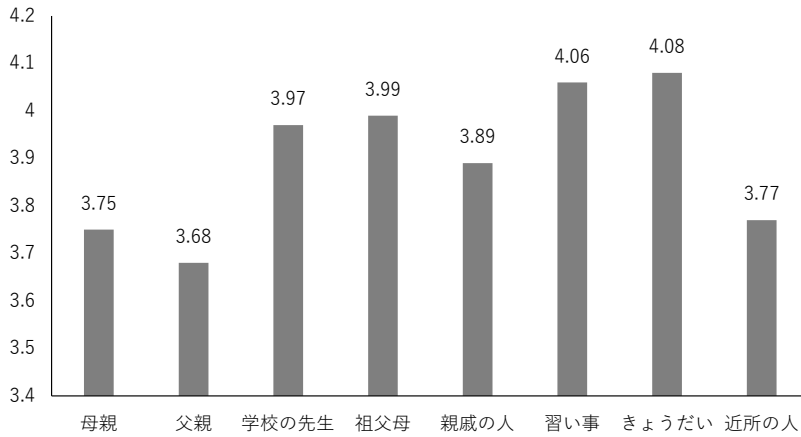


Figure 8 対象別の大人の評価の平均値

男子では全体で 71.2% が肯定的な評価をしていたのに対し、先生では 81.9%、小学生女子では全体で 75.8% が肯定的な評価をしていたのに対し、先生では 83.9% と、その割合はかなり高かった。中学生では、男子では全体で 65.1% が肯定的な評価をしていたのに対し先生では 71.6%、女子では全体で 68.4% が、先生では 60.4% と、男子と女子で異なる結果になっていた。つまり、男子生徒の先生に対する評価は、他の大人への評価と比べると、楽しんでいると答える者の割合が高いが、女子の場合は低いということである。ただし女子も「すごく楽しそう」だけに注目すると、大人全体では 20.2% であったのに対して、先生では 33.3% とかなり高かった。

最後に対象別で楽しそうに過ごしているかの得点に差があるかどうかを検討するために、その他と家族を抜いた対象を独立変数に「おとなの人は毎日楽しそうに過ごしていますか」の得点を従属変数

に一元配置の分散分析を行ったところ有意な差がみられた ($F(7,10325) = 25.26, p < .001, \eta_p^2 = .03$)。多重比較 (Tukey 法) の結果、父親と親戚の人、父親、母親、近所の人と学校の先生、祖父母、習い事の先生・コーチ、きょうだいの間で有意な差が確認された。つまり、先の 3 つの対象 (母親、父親、学校の先生) でいうと、母親や父親よりも、教師のほうを子どもはより「毎日を楽しんで過ごしている」と思っているということである。

(3) 大人に対する評価と他の諸要因との関連

それでは大人に対する評価は他のどのような要因と関連しているのだろうか。それを検討するために、将来に関わる要因 (「社会で役立つことをしたい」「早くおとなになりたい」と家庭と学校に関する要因 (「家庭は楽しい」「学校は楽しい」) に関して、学校種別・男女別に Pearson の積率相関係数を求めた (Table 8)

Table 8 大人の評価とその他の要因の関連

	小学生		中学生	
	男子	女子	男子	女子
社会に役立つことをしたい	.154**	.170**	.191**	.181**
早くおとなになりたい	.121**	.082**	.116**	.048**
家庭は楽しい	.348**	.368**	.372**	.444**
学校は楽しさ	.214**	.232**	.245**	.287**

$p < .01$

まず将来に関わる要因、「社会に役立つことをしたい」については、小学生、中学生、男女ともに $r = .154 - .191$ と弱い正の相関がみられた。つまり、身近な大人が毎日を楽しく過ごしていると思っ
ている者ほど、社会の役に立つことをしたいと思う傾向にあるが、その関連性は弱いということである。さらに「早くおとなになりたい」についても同様に弱い相関がみられたが、男子では $r = .121 - .116$ であったのに対し、女子では $r = .048 - .082$ と有意であるもののほとんど関連性はみられなかった。つまり、男子に関しては「身近な大人が毎日を楽しく過ごしている」と「早くおとなになりたい」ことの間にはわずかに関連がみられるものの、女子ではほとんどみられないということである。

他方で家庭と学校に関する要因では、「家庭は楽しい」との間には $r = .348 - .444$ と正の相関がみられ、特に女子において高い相関がみられた。同様の結果は、家庭ほど強い関連性ではないが、「学校は楽しい」でもみられた。つまり、「家庭は楽しい」「学校は楽しい」と思っている者ほど、「身近な大人は毎日を楽しく過ごしている」と思っているということである。

考 察

以上、札幌市の子どもたちの生活と意識を検討するために、学校・家庭・自己、加えて「身近な大人は毎日を楽しく過ごしているか」という大人への評価とその対象についてみてきた。以下、本研究の結果、明らかになった点をまとめ、若干の考察を加える。

まず学校については、いずれの学年も7～8割の子どもが「学校は楽しい」と肯定的な回答をしていた。その一方で小学5年生において若干肯定的な回答の割合が少なく、中学生では学年が上がるにつれて若干ではあるが、肯定的な回答の割合が減る傾向がみられた。

次に家庭については、7～9割の子どもが「家庭は楽しい」について肯定的な回答をしていた。学校についての意識とは異なり、学年と共に肯定

的な回答が減り否定的な回答が増える傾向がみられた。これは昨年度（加藤・水野・侯・濤岡，2019）にもみられた傾向で、例年共通してみられる傾向である。思春期を親からの自立の時期と捉えると、妥当な結果であると思われる。

とはいえ他の調査と比較すると、内閣府が全国11地区の小学4年生～中学3年生を対象に平成26年に行った同様の調査（内閣府政策統括官，2014）では、「学校生活の楽しさ」について「楽しい（80.6%）」「まあ楽しい（16.2%）」、合わせると肯定的な回答が96.8%であった。この結果と比較すると、札幌市の子どもの学校生活に対する肯定的な意識は7～8割とはいえ、全国の平均と比較すると決して高いとはいえない。

また「家庭生活の楽しさ」について、同調査（内閣府政策，2014）では「楽しい（86.0%）」「まあ楽しい（13.0%）」と肯定的な回答をした者は99.0%であった。この結果と比較すると、学校生活と同様に、札幌市の子どもの家庭生活に対する肯定的な意識は7～9割を超えているとはいえ、それが全国の平均と比較して高いとはいえず、むしろ低いともいえる。

また学校生活の楽しさには、小・中学生共に例年度同様、授業と行事の楽しさ、「学校は『安心できる場所』である」という基本的な安心感が強く関係していた。したがって、これも例年通りの指摘であるが、学校生活の充実を図るためには、何か新たな取り組みが必要というよりも、安心感をベースに学校がこれまでも大切にしてきた授業や行事といった取り組みを再度見直し、充実させていくことが重要であると思われる。また小中学生ともに友だちとの関係の要因が学校の楽しさと比較的強く関連しており、相対的に中学生のほうがその関連性は強かった。これも大人との関係よりも友人との関係の重要性が増す思春期の特徴を表していると思われる。教師との関係も、学校の楽しさと関連しており、具体的には小中学生ともに「先生といると楽しい」「先生は私の気持ちをわかってくれる」「先生は私の話を聞いてくれる」などが比較的強い関連性を示していた。したがって

多忙化する教育現場ではあるが、先生が児童生徒と一緒にいられる時間や話を聞き、児童生徒の気持ちに共感できる時間の確保は、学校生活を楽しむためには重要な要因であると思われる。最後に「学校生活はとても忙しい」という多忙化に関しては弱い関連性ではあったが、小学生と中学生では正負逆の相関がみられた。つまり、小学生では負の相関がみられることから、多忙感が上がるほど、学校生活が楽しくなくなることを意味しており、中学生では逆に多忙感が上がるほど、学校生活が楽しくなることを意味していた。したがって、小学生では多忙感はストレスに感じられる一方で、中学生では充実感に繋がる可能性があることが示唆される。

家庭については、例年と同じく「家庭は『安心できる場所』である」と「家族は自分の話をよく聞いてくれる」が強く家庭生活の楽しさと関連していた。特に中学生においては、「家庭は『安心できる場所』である」が $r = .708$ 、「家族は自分の話をよく聞いてくれる」が $r = .722$ と極めて高い相関係数を示していた。したがって、特に中学生において、家庭生活を充実させるためには、家庭における安心感と親の受容的な関わりが重要になると考えられる。

また文部科学省の調査では不登校の要因として「家庭に係る状況」がしばしば指摘される。例えば、教師の報告に基づく文部科学省(2019)では、不登校のタイプ別の要因として、不安の傾向があるタイプの31.3%、無気力の傾向があるタイプの46.7%、あそび・非行傾向のあるタイプの53.9%に「家庭に係わる状況」が関係しているおり、4タイプあるうちの3タイプの不登校において家庭の要因が第1位であった。そこで昨年度(加藤・水野・侯・濤岡, 2019)と同様に、家庭の楽しさと「『学校に行きたくない』と思うことがよくある」の関連性について検討したところ、小学生で $r = -.231$ 、中学生で $r = -.242$ と弱い相関であった。したがって、小中学生ともに、その関連性はそれ程強くない可能性があることが示唆される。

自己については、中学生以上は、すべての学年

で肯定的な回答よりも否定的な回答の割合が上回っていた。昨年度(加藤・水野・侯・濤岡, 2019)は5年生以降にこの傾向がみられたことを考えると、今年度は少し改善の兆しがみられるといえる。また中学生以降は「どちらともいえない」という割合が昨年同様4割を超えていたことから、この時期、自己の評価について決めがたく、逡巡している姿が推察された。ただし発達心理学的に見た場合、自尊感情の低下は、思春期一般にいわれることである。したがって、札幌の子どもたちの自尊感情が低いということがそのまま問題であるということの意味しているとはいえない。またこれも例年通りの傾向であるが、「自分のことが好きだ」ということについては、「自分にはいいところがたくさんある」という長所と、「自分は役に立つ人間だ」「自分は人から必要とされている」という自己有用感が強く関連していた。したがって、思春期の自尊感情の過度な低下を防ぐためには、自己の良いところに気づくとともに、他者のために役立てるような経験が重要な意義をもつと思われる。

最後に大人への評価については、当初の予想に反して、子どもたちの多くは、身近な大人は毎日を楽しみに過ごしていると思っている程度が高かった。特に母親や父親よりも、教師に対する肯定的な評価が高かった。世間では、教育現場のブラック化(大内, 2018)や疲弊(佐久間, 2019)が叫ばれているが、この結果は、子どもの側からみると違った教師の姿がみえている可能性があることを示唆していると思われる。教師の多忙化は解決すべき教育の重大課題ではあると思うが、その中でも児童生徒に対して「楽しく過ごしている」姿を親以上にみせている日本の教師の姿は肯定的に評価してもよいと思われる。

また子どもが大人になることに対して肯定的な意識をもつために、大人が毎日を楽しんで過ごしていることが重要であるかどうかを検討するために、「身近なおとなの人は毎日楽しく過ごしているか」と「早くおとなになりたい」の相関を検討したところ、ほとんど関連性がみられなかった。世間で

は、子どもが「大人になりたい」と思えるためには、大人が楽しんでいる姿をみせることが重要だなどとしばしばいわれるが（例えば、ベネッセ教育総合研究所，2008）、それほど単純な関係にあるわけではないと考えられる。つまり、大人になることへの肯定感は、単に大人が楽しそうだからといったことでは決まらないということである。この点については、さらにどのような要因が関連しているのか検討していく必要がある。

文 献

- ベネッセ教育総合研究所 2008 「子どもたちは大人になりたいと思っている？なりたくないと思っている？」へ
https://berd.benesse.jp/berd/berd2010/vote/result_24.html
 (2019/12/30)
- 古荘純一 2009 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか
 光文社新書
- 加藤弘通・水野君平 2018 札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査Ⅰ：学校・家庭・自己および居場所に注目して 子ども発達臨床研究，10，1-10.
- 加藤弘通・水野君平・侯玥江・濤岡優 2019 小・中学生の生活意識と遊び：札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査Ⅱ 子ども発達臨床研究，13，1-10.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2019 平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
<https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf> (2019/12/30)
- 内閣府 2019 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(平成30年度)
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html> (2019/12/27)
- 内閣府政策統括官 2014 小学生・中学生の意識に関する調査報告書
https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/junior/pdf_index.html (2018/12/25)
- 太田一徹・柳梯二・水野君平・加藤弘通 2016 「学校・家庭と自分に関する」小学生・中学生アンケート調査 さっぽろ子ども・若者白書をつくる会編 さっぽろ子ども・若者白書，pp.247-269.
- 大内裕和 2018 ブラック化する教育2014-2018 青土社
- 佐久間亜紀 2019 教員不足3つの理由 教員全体が疲れ切っている Web 論座 (2019年5月2日)
<https://webronza.asahi.com/national/articles/2019050600002.html> (2019/12/27)